



The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

Vol.14, 2016.

日本赤十字看護学会

日本赤十字看護学会ニュースレター 第14号 2016年12月発行

NEWS LETTER

— 1



人間が劣等感と依存心で気弱となり、傷つきやすくなり、人の同情や温かみの無さに苦しめられるのは病院や避難所、老人ホームの中だったりする。研究によれば、患者は思いやりのある陽気な雰囲気の中では、より良く、より早く回復することが分かってきた。灰色の壁と不機嫌な顔、そして味気ない食事の中では何ら良いことはない。だから壁には美しい絵を飾り、笑顔を創ろうではないか。

ジャン・ピクテ著：赤十字の基本原則 第2版 p27

平成28年熊本地震被災地における健康・生活状況の把握と支援活動報告

日本赤十字看護学会災害看護活動委員会調査メンバー
委員長 浦田喜久子 委員 小原真理子・前田久美子

熊本地震発災1カ月後、日本赤十字看護学会災害看護活動委員会調査メンバー3名は他組織2名の協力を得、熊本地震被災地における健康・生活状況の把握と支援活動を企画し現地調査を行った。調査のねらいは、熊本地震発災1カ月後における被災地の災害対策本部、病院、避難所等を訪問し、被災者の健康や暮らしの視点から看護ニーズ等を把握し、日本赤十字看護学会のホームページ等を通して、学会会員等にも実態を伝えることである。

訪問地域と訪問先は、熊本市内：日本赤十字社熊本県支部・熊本県看護協会・熊本赤十字病院看護部、益城町：益城町保健福祉センター避難所・特別養護老人ホーム ひろやす荘、南阿蘇村、西原村の各避難所である。

本ニュースレターでは、南阿蘇地域での状況と他組織による支援活動について報告する。

1. 南阿蘇地域における避難所の生活環境

南阿蘇村白水中学校、長陽町南阿蘇中学校、西原村河原中学校の避難所を訪問した。避難者は地域の方々であり、昼間は自宅の片づけや農作業などを行い、夜は避難所で寝るという生活サイクルが定着しつつあった。学校も再開し、子どもたちも避難所から通学していた。

3カ所の体育館が避難所となっていた。体育館内は、物資置き場になっている舞台や出入口に向かう通路が格子型に確保され、家族単位分の広さにカーテン間仕切り（1カ所）やローパーテーション間仕切り（2カ所）がされていた。5月2日にローパーテーションが設置された避難所の住民は、「いいよ、眠れるよ。催しなどは見えにくいけどね。」と語られた。間仕切りによって多少のプライバシーは保たれているようであった。要配慮者への対応は、特に見受けられず、一般の中に家族と一緒に生活だった。女性への配慮として、廊下に更衣用のテントが置かれている所もあった。学校が再開し、間仕切りのスペースで机もない床で勉強している子どもがおり、子どもの学習環境への配慮も必要である。

2. 南阿蘇地域における赤十字救護班及び他組織による支援活動

一時ノロウイルス流行の兆しがあり、感染対策として、食中毒の衛生管理や避難所の掃除の徹底を救護班や保健師等が行い、終息したということであった。

南阿蘇中学校には、発災直後より大阪赤十字病院のd-ERUが駐在し、外来診療、手術、臨床検査、薬局のユニットがあり、キッズルームも設営してあった。大阪赤十字病院と高槻赤十字病院の救護班が8名編成で4泊5日のローテーションで、継続して診療が行われていた。地域の医院が再開し、医療ニーズも減ってきたために5月16日で撤退する予定である。

日赤救護班以外各避難所では、自衛隊、行政、DMAT、日本看護協会災害支援ナース、保健師チームなどが駐在し支援活動が行われていた。朝夕のミーティングで情報共有や調整が行われている。被災者は、昼間は自宅に戻り、片づけや農作業などを行っている。保健師は4人体制で地域の全戸訪問調査を行っていた。日本看護協会の災害支援ナースは、2人体制で3泊4日のローテーションで、夜間帯の避難所の巡視、被災者の見守り、こころのケアを行っていた。昼間は駐在する救護班が巡回診療を担っていた。



南阿蘇中学校 大阪赤十字病院 d-ERU

3. 熊本地震支援の特徴である多団体、多組織チームによる活動の概要

自衛隊、各県行政チーム、DMAT（災害派遣医療チーム）、JMAT（日本医師会災害医療チーム）、DPAT（災害派遣精神医療チーム）、JRAT（大規模災害リハビリテーション支援チーム）、日本看護協会、兵庫県チーム（保健師他）、保健師チーム、薬剤師会、歯科医師・歯科衛生士チーム、JDA-DAT（日本栄養士会）、DCAT（災害派遣福祉チーム）、その他のボランティアが入っており、それぞれの専門領域での役割が発揮されていた。しかし、避難所運営の統括リーダーは不明瞭であり、専門領域ごとのミーティングにより調整や継続した支援活動が行われていた。例えば、医療支援に関しては、JMAT、DMAT、DPAT、JRAT、保健師チームなどとのミーティングによる情報共有と調整、被災者の健康・生活支援に関しては、保健師チームと災害支援ナースとのミーティングで情報共有と調整が行われていた。

活動にあたり、ご協力いただいた被災地の皆さま、支援者の皆さまに感謝いたします。被災地の皆さまの一日も早い復建・復興をお祈り申し上げます。



大阪赤十字病院医療救護班のd-ERUを訪問、被災者の健康問題について話を聞く

学会総会のトピックス

赤十字の看護の歴史に関する 新事業について

歴史研究委員会委員長 西村ユミ

第14回大会時の理事会において、「赤十字の歴史に関する新事業」が提案され、本事業についての委員長を拝命した西村です。本事業は、9月23日に行われた理事会において、歴史研究委員会となりました。

事業内容については、組織づくりを進めながら検討をしていく予定ですが、既に、評議員会、総会等々において幾つものご提案やご期待等を伺うことができ、それらを受けて次のような内容に取り組んでいきたいと思っています。

日本赤十字社における看護師養成には126年の歴史があります。これを踏まえ、このたびの新事業を立ち上げるにあたって重要なことは、次の3点だと考えています。第一に、歴史的にかかわる資料にアクセスできるシステムづくりが必要であると考えます。赤十字の看護に関しては、全国に多くの歴史的資料があります。各地域の資料を保存しつつ、出来る限り資料の価値を共有していくこと、また、必要時にそれへとアクセスできるようになれば、これまでに以上に赤十字の看護に関する議論が進むと思います。第二に、第一を受けた学術活動の推進を予定しております。まずは、学術集会で、会員の皆様と赤十字の看護の歴史を振り返り、我々にとっての社会的責任や今後の展望等々を、熱く議論できることを希望します。第三に、日本赤十字看護学会の歴史を作っていくこと。近年、社会に向けた提言等が求められることが多くなりました。本学会におきましても、赤十字の看護の歴史を踏まえて、様々な意見を提案すべき時期にあると思います。そのための史料をこれまでの史実に求められれば、こんなに力強いことはありません。

以上の活動を通して、本学会の新しい歴史を作って行きたいと思っています。

法人化検討委員会の取り組みの現状

法人化検討委員会委員長 河口てる子

法人化検討委員会では、法人化している看護系学会の現状を分析し、法人化の可否について、手続きや経費、課題などを検討しました。現在、日本看護系学会協議会登録の44看護系学会のうち、法人化しているのは19学会であり、2,000名以上の会員を持つ学会はほとんど法人化しています。一方、数百程度の会員規模の学会は、1学会を除き任意団体です。法人格を取得するほうが信頼性、透明性があり、社会的発信をしていくには法人化が妥当であると考えられますが、課題もあります。

本学会の状況から判断すると、取得は事務的な手続きであるので、可能ではありますが、法人格取得後、学会を維持していくには経費面等に課題があります。具体的には、①事務所の設置、②3か月ごとの会計管理（経費の増大）、③マイナンバー制度による年会費、給与、報酬等、様々な手続きの増大、④役員交代が2年ごととなり、現在の3年ごとの選挙を変更する必要、⑤給与・報酬・収益に関して国税関係、地方税関係の書類作成が必要、⑥学術集会の会計を「特別会計」として扱えず、事業として予算を立て執行、⑦公益事業と収益事業に分けて会計処理、など厳密性・透明性が高まるとともに、作業・費用の増大が予想されます。

いろいろな課題はあるものの、法人格取得は社会の要請に応えるものでもありますので、平成28年度は、法人化を前提に費用・手続き・選挙の移行等のシミュレーションを行うことになりました。

第17回日本赤十字看護学会学術集会 交流セッションレポート

日本とフィリピンの 赤十字国際協力開始にあたって

国際活動委員会委員長 小山真理子

日本赤十字社とフィリピン赤十字社との間で災害看護教育事業プログラムに関する覚書きが締結され、2016年4月から事業が開始されました。この日本とフィリピンの災害看護に関する赤十字国際協力開始にあたって、第17回日本赤十字看護学会学術集会において両国の災害看護教育の現状と課題に関する交流セッションが開催されました。

まず、プロジェクトの策定経緯などについて日本赤十字社国際部の佐藤課長から、2013年11月にフィリピン中部に上陸したハイエン台風の復興事業の中で、災害多発国のフィリピンで看護教育のカリキュラムに災害看護を取り入れることとし、フィリピン大学マニラ校看護学部がこのための教育資料の検討を進めるように、国から要請されたこと等について報告がありました。その後、フィリピン赤十字社からリナ・シソン氏がフィリピン赤十字社の災害対応について、次いで、日本赤十字看護大学の田村由美教授とフィリピン大学看護学部のアーノルド・ボラレス・ペラルタ氏から、日本とフィリピンの災害看護教育の現状と課題についてのプレゼンテーションがあり、それに対する質疑応答がありました。

今回の交流セッションをきっかけに自然災害の多い両国の災害看護教育の充実に向けて、日本とフィリピンの赤十字国際協力の活動のネットワークが益々強化されることを期待しています。



看護実践開発委員会主催の 交流集会を開催して

看護実践開発委員会委員長 守田美奈子



看護実践開発事業委員会では、第17回赤十字看護学術集会〔北見〕で、「急性期病棟で認知症高齢者にどのようなケアを行うかーチームで取り組むケアの仕組みづくりに向けて」をテーマに交流集会を開催し、51名の方にご参加頂きました（7月2日）。

急性期病院での治療は年々高度になっていますが、その治療を受ける患者の高齢化率は上昇しています。それと共に、高齢者や認知症の方に適した回復促進などのケアのあり方が課題になっています。そこで、今回のシンポジウムでは、まず川島みどり氏から、「認知症高齢者の世界への哲学を共有したケアの実践 ワンセットケアの具体化に向かう第1歩」について話題提供をしてもらい、次に高槻赤十字病院の原田かおる氏と、庄原赤十字病院の廣瀬征子氏から、各病院の取り組みを紹介してもらいました。会場からは、入院前の関わりの工夫や、家族をどう

巻き込むかなどについて質問があり意見交換がされました。

アンケートでは回答者全員〔31名〕から「非常に」も含め「良かった」との評価を頂きました。「認知症患者さんの関わりを少し変えることで患者さんの行動が変わることがよく理解できました」「当たり前のことを丁寧にケアを行う必要性を改めて感じました」などの声も寄せられました。また、「患者の思いを尊重すること、抑制で事故防止をすること、どちらの方が大切なのか悩むことがある」などの現場の悩みも書かれていました。

認知症チーム加算がついたことやチームでの援助が活性化することで、ケアの質の高まりが期待されますが、一方で、チームに頼りすぎることによって個々のケア能力が低下する等の落とし穴もあることが交流集会の最後に話し合われました。急性期病院における高齢者ケアのあり方は、これからもますます重要な課題となると思われます。今後とも、本委員会活動へのご理解とご支援を引き続きお願いいたします。なお、今回の交流集会での内容はHPに掲載予定です。詳しくはHPで。（写真は委員会メンバーと発表者、および会場の様子です）



第17回学術集会を終えて

第17回日本赤十字看護学会学術集会
会長 河口てる子（日本赤十字北海道看護大学）



『オホーツクから看護力の発信ー今、求められる看護の開拓魂ー』をテーマに、2016年7月2日（土）・3日（日）第17回日本赤十字看護学会学術集会が、北海道北見市の日本赤十字北海道看護大学にて開催されました。当日は、少々暑くてお天気もオホーツクブルーとはいきませんでした。324名の参加者が熱心に見て、聞いて、討議されました。多数のご参加を賜りましたこと、誠にありがとうございました。

学術集会は、会長講演、シンポジウム、特別講演、教育講演、テーマセッション、ワークショップ、交流集会、市民公開講座、ナーシング・サイエンスカフェ、研究発表とプログラムを多彩に用意しました。これらのプログラムが、超高齢社会を迎え、看護の開拓魂をますます必要としている多くの課題にヒントを与えたと確信し、「看護の開拓魂」を多くの看護師仲間たちと考

える場になったことを、大変嬉しく思っております。

参加者をお迎えした日本赤十字北海道看護大学では、教員・職員と大学院生・学部生のボランティアに支えられて、学術集会はアットホームな雰囲気でした。北見市からはコミュニティバスも提供していただき、北見駅裏の中央プロムナードと大学会場を結ぶシャトルバスを運行することができました。参加者の皆様からは、大変便利と喜んでいただきました。また、北見駅と商店街の垂れ幕、お店のステッカーなどを市を挙げて応援していただきました。ここに深く御礼申し上げます。



第18回 日本赤十字看護学会学術集会 開催のご案内

会長 浦田喜久子

熊本地震及び台風10号豪雨災害で被災に遭われました方々にお見舞い申し上げますとともに、一日にも早い復興をお祈り申し上げます。

さて、第18回 日本赤十字看護学会学術集会は、2017年6月24日（土）・25日（日）に、北九州国際会議場（北九州市小倉区）で開催致します。皆様に、ふるってご参加いただきますようご案内申し上げます。

学術集会のテーマは、「ひとりを見る目、その目を世界へ」～赤十字看護の原点を見つめて～ とし、人道、看護、国際をキーワードにしてプログラムを構成しました。現代の大きな問題であります地球温暖化に伴う気候変動は、確実に大きな災害をもたらし、多くの人々の命と暮らしを脅かしています。また、グローバル化の進展は、経済格差や新しい感染症の世界的規模の拡大等を引き起こし、これらのことが差別や貧困をもたらし、ひいては、紛争やテロの要因とも繋がり、今や世界中の多くの人々が安心して暮らせる環境にありません。人々の命と健康及び人権を守る「人道」を理念として、看護・教育を行う赤十字の看護職者・看護教員は、改めてこれらの状況を再認識するとともに、赤十字の看護の原点を見つめ直し、幅広くお互いの知識を交換・共有し、これからの看護、看護教育の方向性を探究したいと思っております。

基調講演には、日本赤十字社の社長であり、国際赤十字・赤新月社連盟会長である近衛忠輝氏に、特別講演では大阪大学の浜渦辰二氏から、教育講演は、米国在住の竹熊カツマタ麻子氏によりお話いただきます。また、シンポジウムのテーマは、「人権と看護実践」としました。尚、市民講座は、社会的課題でもあります認知症の介護について、認知症のお母様を介護された経験を出版された漫画家の岡野雄一氏にお話頂くことにしております。そして、何より皆様のこれまでの研究をご発表いただき、この学会が多くの皆様にとって学びの場となりますよう心より祈っております。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

平成29年度 研究助成のおしらせ

12月1日（木）から平成29年度研究助成の応募が始まります。会員の皆様のご応募をお待ちしています。詳細は HP をご覧ください。

+ NEWS LETTER The Japanese Red Cross Society of Nursing Science Vol.14, 2016.
日本赤十字看護学会ニュースレター 第14号 2016年12月発行

- 発行 日本赤十字看護学会 広報委員会
東京都渋谷区広尾4-1-3 日本赤十字看護大学内
- 学会ニュースレターは学会ホームページからダウンロードできます。
<http://jrnsns.umin.ne.jp>
- 学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。
nisikata@rctoyota.ac.jp
namimo@rctoyota.ac.jp までお願いします。

●編集後記

今回は、今年4月に発生した熊本地震被災地における支援活動を報告しました。紙面の都合上、紹介できたのは実際の活動のほんのわずかですが、学会のホームページでは詳しい内容が掲載されています。是非ご覧下さい。先日、発生から半年以上経過した今も壊れた家がそのままになっている様子が、報道されました。一日も早い復興を心よりお祈りします。